



第11分科会



V教育課題／社会形成能力

社会形成能力を育む教育活動の推進

九頭竜川 鮎釣り(永平寺町)



地域の高齢者とのふれあい

社会形成能力

1 研究課題

社会形成能力を育む教育活動の推進

2 趣旨

今日の社会では、SNSが発達する一方で、人間関係の希薄化により、地域社会の教育力の低下が問題となっている。少子高齢化による地域活動停滞の傾向が進み、子どもが異なる世代の人々とふれあう機会が失われつつある。また、就業構造も大きく変化し、子どもたちが、自身の未来を豊かに思い描くことが困難な状況も生まれてきている。

このため学校は、子どもたちに、様々な社会の変化を乗り越えようとする強い意志を培い、社会を構成する一員として様々な人々と協働しながら、持続可能な社会の創り手となることができるような資質・能力、態度を育成する必要がある。

校長は、これらのことを踏まえ、身近な社会の問題の解決に向かって、子どもたち自身が進んで考え、取り組めるような教育活動を推進する必要がある。そうした活動を通して、社会の構成員として社会に参画し主体的に活躍できる人材を育成していかなければならない。

また、キャリア教育の視点を取り入れた教育活動を行うことにより、子どもたちに社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力、態度等を育み、自己実現を図りながら、よりよい社会の創造に自ら積極的に関わろうとする人材を育成することが重要である。

本分科会では、よりよい社会の形成者として必要な、身近な社会の問題を解決していく能力や態度などを育むための具体的方策と成果を明らかにする。

3 研究の視点

(1) 社会の発展に貢献する資質や能力を培う教育活動の推進

学校は、子どもたちに、身近な社会の問題を解決する活動等を通して、社会的・職業的に自立した社会人として必要な資質や能力を育み、よりよい社会づくりに参画しようとする態度を養う教育活動を展開していかなければならない。その中で、多様な人々と協働しながら、目指す子ども像を共有し、ともに子どもたちを育む関係を築いていくことが求められる。

このような視点に立ち、自己の役割を認識し、他者と協力しながら、よりよい社会の実現に貢献しようとする意欲をもち、主体的な態度を身に付けるための教育活動の推進について、校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

(2) 地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進

学校は、キャリア発達を促す教育活動を通して、子どもが、地域の大切さを実感するとともに、地域で生きていくことに誇りをもてるようにしていかなければならない。

校長は、日々の教育活動に地域・社会の人々の積極的な参画をマネジメントすることにより、「地域や家庭での役割を果たし、ともに生きること」「社会に参画し貢献すること」を理解し、行動できるようにすることを計画し、また、こうしたことを「学ぶこと」への意欲につなげられるような教育課程を編成しなければならない。

このような視点に立ち、豊かな未来社会の実現に貢献する力を育むキャリア教育を推進する上での校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。



第11分科会

研究の視点 社会の発展に貢献する資質や能力を培う教育活動の推進

研究発表題 すすんで地域の一員として貢献する子

岐阜県可児市立東明小学校長 田中 克典

I 研究の趣旨

可児市では、ふるさとに誇りと愛着を育む「ふるさと教育」の推進に力を入れてきた。その結果、平成29年度の全国学力・学習状況調査において、次の結果が表れた。

Q 今住んでいる地域の行事に参加していますか。

小学校		中学校	
	肯定的な回答		肯定的な回答
可児市	82.4	可児市	77.1
全国	62.6	全国	42.1

Q 地域のボランティア活動に参加したことがありますか。

小学校		中学校	
	肯定的な回答		肯定的な回答
可児市	74.2	可児市	91.3
全国	59.3	全国	70.6

小中共に全国平均を大きく上回り、子どもたちは積極的に地域社会にかかわっていることがわかった。これは、これまで力を入れてきた「地域と協働した教育活動」の成果といえる。

しかし、私たちが注目したのは「地域のボランティア活動への参加」の割合で、中学校と比べるとまだまだ不十分だと感じたのである。

その要因を次のように分析した。

《要因①》地域のよさに目を向ける活動にとどまり、地域の課題にまで踏み込むものではなかった。

《要因②》体験はすれども、人々の地域を思う熱い思いにまでふれる活動にはいたらなかった。

《要因③》体験活動により充実感を味わうことはできたが、一定の役割を担い地域の一員として貢献する喜びを味わうまでの活動ではなかった。

そこで、これまでの「地域と協働した教育活動」を「地域の課題の理解」「人々の思いにふれる活動」

「一定の役割と一員としての自覚」の3点から見直し、「すすんで地域の一員として貢献する子」の育成に取り組むことにした。

1 研究の流れ

(1) 平成29年度 視点の明確化

実践の場は各校であるため、改善を図るための共通視点を明確にした。

(2) 平成30年度 視点にそった活動の見直し

視点にそって各校で活動を見直し、実践を累積した。

(3) 令和元年度 研究実践の充実とまとめ

実践交流を通して更なる改善を図り、これまでの実践をまとめた。

2 研究内容

(1) 地域社会がかかえる課題を理解させ、その解決に主体的に取り組もうとする強い課題意識を育む。

地域の自然、歴史、文化などのよさを子どもたちに伝えることを目的とし、地域との様々な協働による教育活動を実践してきた。ここに、よさだけではなく地域がかかえる課題についての理解を深める学習活動を位置付け、その課題の解決のために自分たちの力でできることを考える活動へと発展させる。

(2) 地域の課題解決に取り組む人々の思いに触れる活動を加え、地域を大切に思う心を知る。

地域には伝統文化を大切に守り続けている方がみえる。また、地域の発展を願い、課題解決に懸命に取り組まれている方々もみえる。地域と協働した教育活動に、こうした地域を思う人々の心にふれる活動を加え、共感・感動する体験を大切にする。

(3) 地域と協働した活動において、子どもたちに一定

の役割を担わせ、地域の一員としての自覚を育む。
 様々な教育活動において、地域社会から大切な一員として期待され、取組を認められる体験の積み重ねが大切である。そこで、活動において一定の役割を担わせ、やりきった事実を価値付け、地域の一員としての自覚を育む。

3 校長のリーダーシップの視点

- (1) 「課題を理解する」「地域を大切に思う心にふれる」「一定の役割と一員としての自覚」の視点から活動の見直しを図るように、職員の意識改革を行う。

学校経営構想に「ふるさと教育の充実」を柱にあげ、これまでの「地域と協働した教育活動」を「地域の課題の理解」「人々の思いにふれる活動」「一定の役割と一員としての自覚」の3点から見直しを図ることについての共通理解を図る。各実践の担当者に、計画段階から相談に乗ったり、助言をしたりして改善内容を職員に周知することで理解を深めていく。

- (2) 地域や関係機関と積極的に連携を図り、願いを共有し有効な活動を創造する。

学校だよりや学校HPに「ふるさと教育の充実」に関する内容を記し、地域に発信する。

また、地域の会合に積極的に出かけ、学校の要望を伝える。特に、地域人講師による指導、地域において児童が活躍することができる活動を新たに創造していただくように依頼する。



II 研究の概要

1 地域社会がかかえる課題を理解させ、その解決に主体的に取り組もうとする強い課題意識を育む。

- (1) アルミ缶回収による車椅子贈呈

市内には、アルミ缶回収の収益金で車椅子を購入し、社会福祉協議会に寄贈している学

校がある。その中には16年間という長きにわたり継続している学校もある。子どもたちは、児童会からの呼びかけにより、アルミ缶回収の活動に参加している。

この活動が子どもたちに社会形成能力を育むものとなるように、地域がかかえる課題に目を向ける学習活動も位置付けるように担当教員に指導した。6年生の児童は、可見市の年齢別の人口の割合を示すグラフから高齢化を知り、高齢者施設の訪問を通して、自分たちにもできることを話し合った。そして、6年生が中心となって全校に積極的にアルミ缶回収への参加を呼びかける動きが生まれた。



また、車イス贈呈式を全校で行い、社会福祉協議会の方から「車イスがどのように活用されているか」の具体的な話をうかがった。地域がかかえる課題解決に向けた地道な取組ではあるが、よりよい社会づくりに貢献することができた喜びを味わうことができた。「地域の課題の理解」の視点から活動の見直しを行った6年生の実践を全職員に周知し、今後の各学年の活動を計画する際の参考とするように指導をした。

- (2) マーチングバンドで町を元気に

4年前から始まった「地区サロン」では、子どもたちが各地区に出かけ、高齢者と一緒にゲームをしたり、話をしたり、歌ったりして楽しい時間を過ごすなどの交流を行っている。校長は、各地区の役員の方々と事前打合せ会に出向き、地区の課題や子どもたちに期待することについて、お話いただくように依頼をしている。

交流を通して、マーチングの演奏を楽しみにしている方が多いことや、37年の歴史をもつマーチングバンドは、この地域の財産であり、誇りとなっていることを再確認した。一方で、



過疎化によって人々が地域を離れ、昔のようにぎわいがなくなったことも知り、子どもたちは自分たちが住む地域の課題に直面することになった。地域の高齢者の思いを聴くことで、マーチングバンドの歴史を自分たちが守る意識が高まるとともに、「このマーチングバンドで町に元気を与えたい」という気持ちが強くなった。

そこで、今年度は地区だけでなく、市の行事等学校外での演奏披露を積極的に行うことにした。そのことにより、地域住民はマーチングバンドの存在を、いっそう誇りに感じるようになった。また、そのことが「学校を支えたい」という住民の意識を高め、教育活動の活性化にもつながっていった。また、マーチングバンドの活動を通して、子どもたちの郷土を愛する心を醸成することにもつながった。この実践を通して、地域のよさだけではなく、課題についても理解させることによって、子どもたちの主体性を引き出すことができることを職員に徹底することができた。



2 地域の課題解決に取り組む人々の思いに触れる活動を加え、地域を大切に思う心を知る。

(1) 伝統文化を大切に思う心に触れる

美濃桃山陶の聖地を校区にもつ小学校では、6年間にわたり作陶を行っている。地域の伝統工芸士の方々の指導のもと、地域の伝統文化を学んでいる。3年生では、古くから地域に伝わる伝統的な野焼きを行っている。そこで、この体験に、地域の方々がふるさとを思う心にふれる活動も加えるように、校長が職員への助言を行った。そして、「学校にある電気窯を使用せず、わざわざブロックを積んで窯を手づくりする理由は何だろう。」と課題を設定し、探究活動を行うように改善を図った。籾殻を入れて3日間、じっくりと火を入れることで、野焼き

独特の風合いが生まれる。「手間と時間をかけてでも伝統文化の素晴らしさを伝えたい」という思いを子どもたちは学



ぶことができた。3年生のこの取組について学校だよりで、職員はもちろんのこと、広く「地域を思う心にふれる」活動の重要性を紹介した。

(2) 地域の未来を地域の人々と語る活動



これまでの恒例行事として、地域の花火大会の折に、子どもたちが踊りを披露してきた。子どもたちも楽しみにしている行事の一つである。

しかし、子どもたちの多くは、地域で踊ることにどんな意味があるのかは理解していない状態であった。そこで、子どもたちが願いをもって活動する姿を期待し、「地域を大切に思う心にふれる活動」を加えることにした。可見市オリジナルの踊りを考案された方に来校いただき、踊りを通して街を盛り上げていきたいという願いを子どもたち伝えていただいた。これまでは踊りを楽しむことが目的であった子どもたちの意識が変わり、「踊りを通して街を元気にしたい」という願いをもつことにつながった。花火大会当日には、地域の活性化に貢献することができた喜びを味わい笑顔で元気よく踊る子どもたちの姿を見ることができた。

また、新たに「地域の未来を語る会」を計画し、消防団員や花火大会実行委員長と6年生の子どもたちが、地域の未来について話し合う機会を設けた。地域を思う心に触れ、「大人になったら消防団に入りたいと思った。」「就職や進学で可見をはなれることになっても、可見に戻り地域の発展に貢献したい。」という子どもたちの声を聞くことができた。

3 地域と協働した活動において、子どもたちに一定の役割を担わせ、地域の一員としての自覚を育む。

(1) ホタル飼育活動

平成4年度にPTAが可児市から「蛍保護育成事業」を委託され、児童によるホタル飼育・放流活動が始まった。それ以来、27年間に亘りこの活動を続け、地域課題の解決に貢献している。産卵・孵化からはじまり幼虫飼育・放流会、そして飛翔確認までの1年間の活動である。

そこで、校長が市の担当課に出向き、子どもの活動報告の場を設定していただくように依頼をした。その結果、取組を地域に発信する発表会を行うことができた。多くの地域の方々に参加していただくことができ、地域の一員として貢献することの喜びを味わう貴重な体験となった。

こうした地域貢献活動によって、次のような子どもの姿が見られた。郷土の歴史を学ぶ講座への参加を促すポスターを自らづくり、センター長とともにPRする児童である。進んで地域貢献しようとする姿を全校に紹介し、全校児童に「よりよい社会づくりに参画」しようとする意識を高めている。



(2) 駄菓子屋横丁、副読本づくり

地域の課題の一つに、地域コミュニティの希薄さがある。校長がその課題について、地域に出向いて丁寧に説明を行うとともに、活動への協力を求めた結果、学校・PTAを交えた自主的運営組織が立ち上がった。それぞれの関係団体が、膝をつき合わせての会合が始まり、学校・家庭・地域連携を進めた。「駄菓子屋横丁」は、かつて多くの街に交流の場所としてあった駄菓子屋を、子ども達同士が協力して運営することで、子どもが社会経験を積むとともに、世代間の交流を深めることを期待した。その



一役を担った子どもたちは、生き生きと活動し、貢献する喜びを味わうよい機会となった。

また、今年度からは、地域の指導者のもとで、子どもたちが地域を巡って学んだことを副読本にまとめて発信する活動も、地域と学校が連携して行っている。

III まとめ

3つの視点から活動を見直したことにより、全国学力・学習状況調査の「地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか」の回答結果が、下の表のように向上した。

平成 29 年度	平成 30 年度
74.2 (全国差 +14.9)	76.6 (全国差 +14.0)

1 成果

- (1) 地域の課題を知ったり、地域を思う人々の心にふれたりすることで、課題解決に主体的に取り組む子どもの姿を生み出すことができた。
- (2) 子どもが一役を担うことで、貢献する喜びを味わうことができ、地域の一員としての自覚を高めることができた。

2 課題

6年間の様々な地域と連携した教育活動を体系化し、社会形成能力の育成によって、有効なプログラムへと見直しを図る必要がある。



第11分科会

研究の視点 地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進

研究発表題 地域との連携によるキャリア教育の推進と校長の役割 ～子どもたちに社会形成能力を育むために～

福井県吉田郡永平寺町御陵小学校長 竹内 康高

I 研究の趣旨

福井県永平寺町では、町学校教育方針「ふるさと永平寺を誇りに思える魅力ある学校づくりをめざして」のもと、小中10校がそれぞれの特色を出し、教育活動を推進している。特に小学校においては、地域との連携に重点を置き、体験的な学習活動に取り組んでいる。

学校においては、この体験的な学習活動を充実させるとともに、家庭・地域との連携を図り、子どもたちが様々な人々や社会との関わりをもてるような教育活動を推進していくことが重要である。

研究を進めるにあたり、「地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進」という視点のもと、目指す子どもたちの姿を「地域の大切さを実感し、誇りに思う」「地域や家庭での自己の役割を果たそうとする」「働くこと、人に感謝することを大切にする」と掲げ、これらを社会形成能力の基本と考えた。

そこで、本校の教育活動の「地域との連携」を重視した取り組みの中から、「御陵小学校の特色ある取組」「地域と進める体験推進事業による取組」を推進しながら、子どもたちに社会形成能力を育むことができているかを考察する。

また、この研究を通して、地域との連携によるキャリア教育を推進する上での校長の役割を明らかにする。

II 研究の概要

1 取組開始時の校長としての動き

(1) スクールプランによる取組の明確化

教育活動の中における取組の位置付けについてスクールプランを作成し、先生方に共通理

解を促し、「チーム御陵」として一枚岩となって動くための働きかけをした。

(2) 「地域との連携」に関する実情の把握

「地域と進める体験推進事業」の始まる前年度から、家庭・地域・学校協議会の方々と話し、地域のリーダー・学校サポーターの立場からの意見を集約した。

ア 子どもたちの現状

- ・地域の方と触れ合う機会が少ない。
- ・体験的な活動をする機会が少ない。

イ 地域や保護者の方の思い

- ・子どもたちには、学校や地域を好きでいてほしい。
- ・子どもたちには、地区の歴史も学んでほしい。
A：五領ヶ島地区（兼定島・末政・渡新田・下合月・上合月）
B：昭和の大合併で参入した地区（領家・樋爪）
C：平成になり参入した地区（平成・御公領・学園）
- ・学校は、「地域民の集いの場」であってほしい。

(3) 「学年に合わせたキャリア教育」のねらいの提示（文科省 国立教育政策研究所の資料）

先生方に取組で求める子どもたちの姿について説明し、キャリア教育が難しい取組でないことへの理解を得た。キャリア発達について理解しておくべき視点を分かりやすく示したもので、提示した内容を基準にして、今まで継続して取り組んできたことに対して、低・中・高学年別の「視点」をもち、改めて継続して進めていくことをお願いした。このようにすることで、日頃実践している活動の延長であることを意識して取り組んだ。

2 御陵小学校の伝統である「特色ある取組」

(1) 取組のねらい

- ・御陵小学校の伝統ある特色を守り、さらに改善していきながら、学校愛・地域愛に結び付くような心情を育む。
- ・学校と地域を自慢できる子どもたちを育て、子どもたちの「自己有用感」を育む。

(2) 活動の紹介

ア 学校花壇・花いっぱい活動（花づくり）

花壇づくりについては、平成になってから本格的に取り組みはじめ、30年ほど続いている伝統ある取組である。

また、地域の方々に花の苗を分けるようになったのは、ここ十数年のことである。さらに、この2年間は、校舎まわりのいろいろなところで学校を花いっぱいにする活動をしている。



イ 学校畑活動

(野菜づくり)

学校畑活動については、歴史が古く、始まった年ははっきりしないが、地域の方々に助けをもらって野菜を育てたり、幼稚園の子どもたちと一緒に活動



したりすることにより、より親しい交流ができている。

3 「地域と進める体験推進事業」の取組

本校は、平成30～令和2年度の3年間、県事業「地域と進める体験推進事業」に取り組んできた。地域コーディネーターの方を中心に、地域との連携を図りながら、地域の特性を生かした取組を展開してきた。

(1) 各学年の体験活動

- ア 1、2年生で「サツマイモ栽培」
- イ 3、4年生で「五領タマネギ栽培」
- ウ 5、6年生で「御陵っ子米作り」
- エ 6年生で「学校林植樹活動」

(2) 取組のねらい

- ア 豊かな自然環境の中での農業体験活動を通して、自然を愛し、働くことの喜びや尊さを体得させる。
- イ 様々な体験活動を通して、仲間と協力したり、助け合ったりする心や思いやりの心を育てる。
- ウ 数々の栽培活動をする中で、食に対する感謝の念や命を大切にすることを育てる。
- エ 地域の方々と様々な活動を通して、地域との交流を図り、「ふるさと御陵」を思う気持ちを高める。

というねらいのもと、活動を進めてきた。

(3) 体験活動の紹介

- ア 「サツマイモ栽培」1、2年生において、サツマイモの苗植え、収穫、調理

サツマイモ作りでは、学校近くの幼稚園にも声をかけをし、年長組と一緒に活動を行った。また、サツマイモの苗植えにおいては地域の方にも声をかけて、協力してもらった。



収穫したサツマイモは学校給食に出してもらったり、自分たちで巾着づくりをしたりして、食べた。小さな苗が、大きく成長しておかずとして食べることができた体験は貴重なものとなった。

- イ 「五領タマネギ栽培」3、4年生において、



タマネギの苗植え、収穫、調理

例年、学校の敷地内で野菜栽培を行っていたが、「もっといろいろな野菜を育てたい」「地区の特産である『五領タマネギ』を栽培したい」という子どもたちの声を受け、学校前の畑を借りて栽培を行った。栽培の仕方について地域の方から指導・協力を受けながら、苗植え・除草・収穫などの栽培活動に取り組んだ。前年度に植えた五領タマネギを6月に収穫し、地域の方の指導を受けながら、調理にも挑戦した。これも初めての取組でとてもよい経験であった。



ウ 「御陵っ子米作り体験」5、6年生において、

田植え・稲刈り・御陵っ子米販売

地域にはたくさんの田があるが、実際に農作業体験をしたことのある児童は少なく、「やってみよう」という願いが強かった。そこで、地域の方や保護者の指導・協力を受けながら、田植え・稲刈り体験を通して農作業の苦労や工夫について学んだ。特に、機械化による作業効率の良さも目で見、感じることができ、貴重な体験ができた。また、台風の影響で収穫前に稲が倒れ、稲刈りが大変だったり、はさがけの稲が飛んだり、自然相手の農業の苦労が身にしみて分かった。



さらに、10月の御陵公民館祭りで「御陵っ子米」の販売を行った。販売までの準備として、「御陵っ子米」のキャラクターを考え、米袋にキャラクター



のシールを貼ったり、袋詰めの方法や結び方も習ったりした。当日は、6年生が中心になり地域の方に販売した。元気な声で呼びかけをするなどとてもよい経験ができた。

エ 「学校林植樹活動」6年生において、さくら記念植樹・学校林の歴史講習

学校林は、地区の学校林保護団体「七福産業振興会」が中心になって整備が進められ、平成29年度に小学校の子どもたちにも身近に感じてほしいということで、学校林を守り育てる活動をさせてもらうことになった。自分達でできる活動として、「植樹を行いたい」という子どもたちからの提案があり、振興会の協力を得て、学校林の頂上付近にオオヤマザクラ5本（平成30年度）、カワヅザクラ5本（令和元年度）を植樹した。また、学校林の頂上までの道中で、「学校林の歴史」について説明をしていただき、「自分達の学校の学校林だ」という認識を深めることができた。



III まとめ

これまでの「御陵小学校の特色ある取組」と「地域と進める体験活動の取組」の2つの取組を振り返って、「子どもたちへの社会形成能力の育成について」と「地域との連携によるキャリア教育を推進する上での校長の役割について」の2点についてまとめる。

1 成果と課題

(1) 子どもたちへの社会形成能力の育成について

ア 児童の様子から

- ・ 幼稚園さんと一緒に活動ができたという喜び
- ・ 楽しさを感じ、教えてあげられたという自信
- ・ 収穫したサツマイモを使った料理体験ができた。
- ・ 「地域を代表する野菜づくりをしたい」という願いが実現できた喜び
- ・ 「五領タマネギ」を使った調理ができた喜び
- ・ 「米作りをしたい」という願いを実現
- ・ 作業の苦労や工夫を感じることができた。

- ・台風など自然を相手にした苦労を体感できた。
- ・収穫の喜びも感じる事ができた。
- ・販売の苦労や工夫、楽しさを感じる事ができた。
- ・地域の方々との交流・ふれあいで感謝できた。
- ・学校林活動の苦労工夫を体感する事ができた。
- ・自分たちの「学校林」という思いを強く感じた。
- ・学校林の歴史や植樹の方法を学ぶ事ができ、「実際に記念植樹ができた」という大きな喜びを味わう事ができた。

イ 児童に対してのアンケートの実施

「社会形成能力」の育成につながるねらいとしての、(仕事の充実感)・(協働の満足感)・(物事への感謝)・(人への感謝)・(地域愛)・(自信)・(向上心)・(価値の見いだし)の8項目について、児童の自己評価を試みた。

結果は、(仕事の充実感)が91%、(協働の満足感)が94%、(物事への感謝)が92%、(人への感謝)が90%、(地域愛)が82%、(自信)が59%、(向上心)が93%、(価値の見いだし)が65%であった。仕事の楽しさや一緒に働くことのうれしさ、自分で育てたものや教えていただいた方への感謝の気持ち、この活動をこれからも続けたいという気持ちはかなり高い評価であった。その反面、「ふるさと御陵」を思う気持ちや自分の心の成長を感じる事、自分の将来に役に立つと感ずることができるよう働きかけや工夫が今後の課題であることが見えてきた。

ウ 保護者に対してのアンケートの実施

「地域と進める体験活動の取組」のねらいを保護者に伝え、それがどの程度達成できていると感ずるかについて、アンケートに答えてもらった。

(仕事の充実感)が81%、(協働の満足感)が81%、(感謝する心)が78%、(地域愛)が76%であった。達成度としては、8割ほどが目標であったので、保護者の受け取りとしては、「ほぼ達成できている」という評価をいただいたと考えた。ただ、地域の方への感謝、「ふるさと御陵」を思う気持ちがやや低く、児童の感じ方ともよく似ている部分であり、この部分を伸ばす工夫が必要であることが見えてきた。

①(地域愛)「ふるさと御陵」を思う気持ちを高める、②(自信)自分の心の成長を感じさ

せる、③(向上心)自分の将来に役に立つように感じさせるという課題が浮き彫りになった。

(2)「地域との連携によるキャリア教育を推進する上での校長の役割について」

ア 校長として実践してきたこと

- ・スクールプランによる取組方針の明確化
- ・「地域との連携」に関する実情の把握
- ・「学年に合わせたキャリア教育のねらい」の提示
- ・「特色ある取組」のねらいの明確化
- ・「地域と進める体験活動」のねらいの明確化
- ・地域コーディネーターの依頼・任命
- ・「学校だより」での取組の広報
- ・児童、保護者、教員の意見集約

イ これらの取組に対する本校教職員の意見

- ・子ども主体になるように、これらの取組に向けて、子ども目線で調べたり考えたり、取り組む学習を取り入れる。
- ・地域のためになる活動を継続することで、地域の一員としての役割を担うことができたという思いが高まるのではないか。
- ・自分個人や家族が一緒になり、自信をもって、他地域に発信し、親子や地域で共有できるような経験や学習を今後取り入れる。
- ・取組のあとの児童の振り返りや感想を保護者が見る機会を設けるとよかった。感謝や地域愛は、記憶に残りやすく、楽しさも感じられるものであると、将来に渡って意識が育まれる。

2 今後への取組

校長の役割として必要なことをまとめてみると、方針の明確化、的確な実情の把握、地域とのつながりの強化、地域への広報、組織力の強化、教職員(校内人材)の育成などである。今回の取組を通して、校長の在り方について思うのは、校長は、明確な方針の提示をし、適切な組織を編成し、組織の強化・地域との連携・協働を図るなど、至るところでリーダーシップを発揮し、学校教育活動を進めていかなくてはならないということである。

そして、教師主導の取組に子どもたちを乗せるのではなく、子ども主体の取組を教師がサポートするような体制づくりを教職員とともに進めていく姿勢が大事であるということも改めて学んだ。